



じりつ「自律と自立」

指 宿 高 等 学 校
進路指導部 第 2 号
発行日 R 7. 7. 2 5 (金)

総合型選抜・学校推薦型選抜に備える

総合型選抜 ……8月～12月くらいに実施。自分が探究してきたテーマや各学校が指定してきたテーマを深く掘り下げ、面接でプレゼンしたり、与えられた課題をどう解決していくか小論文にまとめたりする力で合否を判定する。基本的に教科の試験はないことが多い。

学校推薦型選抜……10月～11月くらいに実施。高校3年間の成績や出席、活動実績に加え、今後の学ぶ意欲や能力を小論文や面接で判定する。特定の教科の試験がある場合もある。

一般入試 ……1月の共通テストや1月～3月にある各学校の教科の試験の得点力で合否を判定する。課される教科の試験数は、専門学校1～2科目、私立大学2～3科目、公立大学3～4科目、国立大学5～7科目くらい。

最新の2025年度入試において、国公立大学の総合型選抜と学校推薦型選抜を合わせた募集人員は全募集人員の24.3%になっています。国公立大学生の4人に1人が総合型選抜と学校推薦型選抜で合格していることがわかります。私立大学では、さらに大きく数値が伸びて合格者の約60%の学生が総合型選抜と学校推薦型選抜で合格しています。専門学校では大学に比べて一元的にまとめデータがありませんが、総合型選抜と学校推薦型選抜での合格者は私立大学以上の割合であり、学校によっては合格者の9割を超えている場合もあります。一般入試の合格者の割合は少しずつ少なくなっているのです。これらに備えるには教科の勉強はもちろん、次のようなことについても取り組んでおく必要があります。

① 欠席を3年間で一桁（9日以内）以内を目標にする。

→難関大学では皆勤で評定平均も5.0というような生徒もたくさん出願してくるので、欠席が10日を超えればかなり見劣りするでしょう。ちなみに就職の話にはなりますが、以前ある大手企業の採用担当の方とお話しをした際、「欠席が3年間で10日以上生徒さんは（仮に筆記の成績が1番でも）必ず不合格にしている。」とおっしゃっていました。少しでも欠席を少なくしておく努力は、将来のために重要です。

② 評定平均を4.5以上にすることを目標にする。

→各教科の評定は日頃の提出物や定期考査の頑張りによって年度末に決定します。相対評価（「上位何%が評定5」というような評価方法）から絶対評価（「ある基準をクリアしていれば、クリアした全員が評定5」というような評価方法）に変わって、各高等学校の評定が高めになっている傾向があるので、4.5以上は欲しいところです。

③ 自己アピールできる資格や体験を積み上げ記録に残しておく

例えば、自己アピールの記入欄が、部活動の記入欄とは別の記入欄になっていたりすると、自己アピールの記入欄に書くことが何もなく空欄になってしまう生徒がいます。これでは受験校の先生方に「ぜひこの生徒を合格させよう」と思ってもらうのは難しいでしょう。英検、数検、漢検など積極的に受検し、ボランティアなどに参加した場合は写真や参加証などを保管しておくことをお勧めします。

④ 朝のTVニュースや新聞、報道番組を見る

小論文対策は、面接対策よりはるかに時間がかかり、かつ受験生の力の差が大きく出ます。書き方は最短2～3週間ほどでマスターできますが、具体例を挙げて結論に導くのが小論文であるため、日頃からその具体例集めをしなければなりません。この具体例のバリエーションを持っていると、いろいろな課題文にそれなりに対応できます。これは日頃から意識していなければできないことですが、やっていない人は今すぐにも始めて下さい。ネタ帳としてノートやデータ集をつくっておくと、面接対策にも小論文対策にもなります。

なかでも朝のTVのニュースはおすすめです。昨日のニュースのトピックスを並べて、一つ一つを簡潔に説明していくので、10分くらいで世の中の動きを知ることができます。しかも同じことを何度も繰り返して言うので、どの時間帯から見始めた人でも分かるような番組構成になっている点が忙しい社会人や高校生に向いていると思います。

■ニュースのまとめ方の例■

- ・ ウナギは「魔魚」と呼ばれ、謎が多く人間によるコントロールが難しい。産卵場所は2011年頃にマリアナ諸島付近と特定するも詳細は不明。普段スーパーで買って食べているウナギは9割がオス。2025年7月、「国立研究開発法人水産研究・教育機構」がウナギを卵から孵化させ量産する完全養殖の基幹技術（水槽と餌）の特許を取得。ワシントン条約で国際取引の規制が検討されるなど天然資源の保護意識が高まる中、環境負荷の少ない養殖に期待が集まっている。シラスウナギ（稚魚）の時は雌雄が決まっていなかったが、養殖で育てると9割以上がオスになる。冬場に食欲が減るオスに対してメスは食べ続けるので身が大きく、旨味成分のグルタミン酸もオスの1.5倍。「うなぎの兼光」は、大豆イソフラボンをウナギの餌に一定期間混ぜることで、養殖で99%メスに育てる技術を確立。

まとめ方のポイントは、「国立研究開発法人水産研究・教育機構」「うなぎの兼光」「グルタミン酸」「大豆イソフラボン」といった固有名詞と、「2025年7月」「2011年」「9割」「99%」といった具体的な数字をきちんと記録しておくことです。

そうすることで、具体性やイメージのしやすさ、説得力が増し、さらに後で調べたいときに検索もできます。「うなぎがおいしくなる」という曖昧で主観的な表現よりも、「旨み成分のグルタミン酸が1.5倍になる」という科学的、客観的な表現のほうが論文の書き方としてふさわしいのです。